

中国遼寧省の見聞記と地歴連携授業試案

The Observations on Liaoning Province in China and A Sample Teaching Plan Connecting Geography and History

伊藤 善文*

ITO Yoshifumi

Abstract : The writer visited Liaoning Province in China in August 2019. Liaoning is located in the northeastern part of China. Liaoning has Lushun and Dalian, which were historically the ruins of the Russo-Japanese War and Japan's lease lands. It also has Shenyang, where the Manchurian Incident happened in 1931. I remembered South Manchuria Railways and the Sino-Japanese War when I visited there.

On the other hand, geographically under the reform and opening-up policy, its industry has been developed and the living standard of the people there has been improved.

On a topography of Liaoning Province I will present a sample teaching plan connecting geography and history based on the writer's observations and references.

Key words : Liaoning Province in China, the Manchurian Incident, the Sino-Japanese War, Reform and Opening-up Policy, Teaching Plan Connecting Geography and History

要旨 : 筆者は2019年8月に中国遼寧省を訪れた。遼寧省は中国東北部に位置し、歴史的には日露戦争の戦跡や日本の租借地であった旅順・大連。満州事変勃発の地である瀋陽。さらに、南満州鉄道や日中戦争などが想起される。他方、地理的には、改革開放政策の下、産業が発展し、生活は向上している。このような遼寧省の地誌について、筆者の見聞と資料をもとに地歴連携授業試案を提示する。

キーワード : 中国遼寧省、満州事変、日中戦争、改革開放政策、地歴連携授業

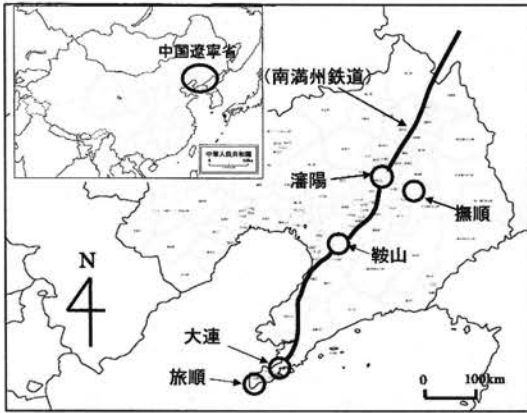
1 はじめに

筆者は2019年8月24日～28日に中国遼寧省の旅順・大連・瀋陽などを訪れた。遼寧省は中国東北部に位置し、歴史的には清朝建国の地であり、満州事変の発端となった瀋陽（旧奉天）。日露戦争後に日本の租借地になった旅順・大連。さらに、満州事変以降の日本の中国進出（侵略）など、歴史授業の教材には事欠かない。他方、地理的には、

とうもろこしや大豆などの畑作農業。撫順の石炭、鞍山の鉄鉱石や鉄鋼などの鉱工業。さらに1978年12月以降の改革開放政策による経済技術開発区の創設とその後の工業や貿易の伸張など、地歴連携の教材を考えることができる。

そこで本稿では、筆者の見聞と資料をとおして、中国遼寧省の地誌について、高等学校地歴科および中学校社会科の地歴連携授業試案を提示する。

* 甲南大学教職教育センター非常勤講師・教職指導員



中国遼寧省 旅順・大連・瀋陽・撫順・鞍山の位置

2 見聞の視点および見聞記

筆者は遼寧省の景観・産業・生活を地理学的視点、すなわち、①初象（新しい地理的事象）、②顕象（顕著な地理的事象）、③残象（過去の地理的事象）¹⁾に留意し、見聞した。旅程および主な見聞記は以下のとおりである。

【1日目】

○関空→大連空港・大連→昼食→高速鉄道（2時間20分）で瀋陽（泊）

（1）大連

大連空港上空から市街地を見ると、高層ビルが建ち並ぶ大都会。人口398万人（市轄区、2017年）²⁾ 2009年に行った北京上空は大気汚染で下が全く見えなかったが、大連は違う。大連駅は1935年、上野駅をモデルに南満州鉄道が建設し、2003年に作り直した。大連駅では荷物検査をして待合室へ行き、高速鉄道に乗った。

（2）大連から瀋陽へ

大連駅を出発後、煙突のある住宅群が見えた。ガイドさんによれば、かまどで米を炊いている。トウモロコシの茎を乾燥したものを燃料にしている。その煙突だという。エビの養殖池も見えた。中央に水車が回っていた。



エビの養殖池、2019.8.24 筆者撮影

ビニールハウスが見えた。ほうれん草、きゅうり、レタスをつくっている。畑では、トウモロコシ、大豆、ジャガイモ、落花生、ブドウ、サクランボをつくっている。

収穫間近の黄色い田が見えた。近年の農業分布図では中国東北部は米の産地と記されている。



収穫間近の稲作地帯、2019.8.24 筆者撮影

沿線の農村地域で一番見たかったのはコウリヤン畑だったが、コウリヤンはつくっていないとのこと。もっと北のほうか。

鞍山付近では製鉄所の高炉が見えた。満州時代に満鉄が経営し、昭和製鋼所の流れをくむ鞍山の製鉄。撫順の石炭、鞍山の鉄鉱石と鉄鋼業は原料指向型工業の定番である。

瀋陽に近づく。瀋陽も人口586万人（市轄区、2017年）³⁾で高層ビルが林立した大都会。瀋陽のビル群は顕象か。社会主義国・中国の豊かさを実感する。



瀋陽駅近くの高層ビル群、2019.8.24 筆者撮影

【2日目】

○撫順戦犯管理所・撫順戦犯監獄→撫順炭田→昼食→瀋陽鐵路陳列館→九・一八歴史博物館→夕食→夜市、日本領事館、コリアンタウン、旧奉天ヤマトホテルなど→瀋陽（泊）

（1）撫順戦犯管理所・撫順戦犯監獄

撫順戦犯管理所・撫順戦犯監獄は、管理所内の銘文によると、

「1950年～1964年まで、中国の侵略戦争に参加した約1000名の日本人戦犯が収容され、改造された。日本人戦犯を罪悪の深い淵から抜け出させた。かつて「鬼」であった人間が、



侵略戦争に反対し、**撫順戦犯管理所・撫順戦犯監獄**、世界平和を推進する

2019.8.25筆者撮影

新しい人間へと再生し、ここに世界の戦犯管理の歴史における「撫順の奇蹟」を創り出した。」(抜粋)と記されている。清朝最後の皇帝、満州国執政および皇帝の溥儀も収容された。

（2）撫順炭田

撫順炭田は東西6.6km、南北2km、深さ300m⁴⁾。撫順の石炭露天掘りは地理教科書の定番。『復刻版少年満洲讀本』⁵⁾には世界一の産出量、埋蔵量、シェールオイルも採れると記されている。それにしても広い、大きい。露天掘りは、やや霞んで(大

気汚染?) はっきりと露頭が見えなかった。深さ300m近くから掘り出され、ベルトコンベア? で地上の火力発電所に運んでいるのか。露天掘り内に鉄道もあった。



撫順炭田の露天掘り、2019.8.25 筆者撮影

露天掘りを展望する広場に2018年に習近平が視察した写真と標語「不忘初心 牢记使命」があった。また、付近の道路には、「堅持以新發展理念引領經濟高質量發展」「証改革發展成果更多惠及全体人民」のスローガンがあった。社会主義国だ。



習近平が撫順炭田を視察した説明板、2019.8.25筆者撮影

（3）新しい開発区、瀋撫地区

撫順炭田から瀋陽市への移動中、新しい開発区を通った。数年前までは畑だったこの地区は、広い道路、新しい工場、高層ビルがあり、建設途上だった。「深圳」と書かれた公司(会社)もあった。26億元をかけて開発しているという。外資は日本、韓国など。ドイツ系の会社もある。メルケル首相が来た。中国にはドイツ車が多い。改革開放後、中国はドイツのフォルクスワーゲンと最初に提携

した。

バスが交差点で信号待ちをしているとき、「習近平社会主義思想為指導」「推進瀋陽改革」の標語があった。習近平主席の指導の下、国家戦略として開発していることが分かった。習近平は毛沢東を超えたのか。この開発区はまさに、初象、顕象である。

(4) 瀋陽鐵路陳列館

瀋陽鐵路陳列館には当時の日本の鉄道技術の粋を集めた満鉄の超特急「あじあ号」をはじめ、蒸気機関車などが展示されていた。「あじあ号」を牽引した蒸気機関車「パシナ」751号の説明には、1934年大連工場で製造、全長25.6m、最高時速130km、車輪直径2m、重量119.2t、1983年退役とあった。



満鉄の蒸気機関車パシナ751号と筆者、2019.8.25撮影

(5) 九・一八歴史博物館

九・一八歴史博物館は満州事変、柳条湖事件などを後世に伝える反日教育施設。「1931年9月18日は中華民族の国辱の日、中華人民は未来永劫忘れ得ぬ日として記憶することを誓う。」と記されている。毎年、鉄道爆破時刻の10:08に式を行い、国の恥を忘れないよう一般車もクラクションを鳴らす。戦争が14年間続いたので、鐘を14回たたく。写真(残酷な写真あり)や文を読んで、なるほどと思った。



九・一八歴史博物館、2019.8.25筆者撮影

(6) コリアンタウン

コリアンタウンには北朝鮮料理店がある。平壤館の前には若い女性(20歳~24歳)が店の前に立っていた。食事とショーを見ることができる。値段は不明。北朝鮮の女性は3年経ったら国に帰る。国に帰ったらいい仕事に就ける。

【3日目】

○故宮・北陵→昼食→張氏帥府博物館→高速鉄道(2時間)で大連北駅、大連(泊)

(1) 工事が止まった高層ビル



工事が止まった高層ビル、
2019.8.26筆者撮影

故宮へ行く途中で廃墟のような高層ビルがあった。ガイドさんに尋ねると「お金がなく工事が止まっている」とのこと。資金繰りはどうなっているのか。これは残象だろう。顕象になる日はくるのだろうか。

(2) 故宮、北陵

故宮は清朝を建国した初代皇帝ヌルハチ、2代皇帝ホンタイジの皇宮で、歴史的建造物かつ世界遺産で残象とは言い難い。

(3) 張氏帥府博物館

張氏帥府博物館は張作霖・張学良の執務室などを見学した。確か、張作霖が爆殺された1928年6月4日は張学良の誕生日だったはず。

(4) 瀋陽駅から大連北駅へ

瀋陽駅を出発した後、高速鉄道沿いの高層ビルに灯りがあまりついていない。都会も農村もだ。全部入居していないのか。高層住宅は林立しているが、全部入居していないとなると、売れ残りか。大連北駅に着いたのは夜。街灯はついていますが、ビルも全室灯りがついていない。全部、入居（完売）しているのであれば、灯りがついていない部屋は何か。高層ビルや高層住宅は発展する中国を示す顕象だが、仮に売れ残りとなると残象か。

【4日目】

○大連→東鶏冠山北堡壘→昼食→二〇三高地等→大連（泊）

(1) 中山広場周辺

中山広場の周辺には旧大連ヤマトホテル（現大連賓館）や旧横浜正金銀行（現中国銀行大連分行）、旧南満洲鉄道株式会社本社（現大連満鉄陳列館）などがある。建物は日本統治時代につくられたものだが、現在も建物を使用しているのは、思想を超えて建造物に対する価値観が受け継がれているものと思われる。保存活用しているので、残象&顕象といえる。



旧横浜正金銀行（現中国銀行大連分行）、2019.8.27筆者撮影

旧南満洲鉄道株式会社本社（現大連満鉄陳列館）は1906年～1909年にかけて建設した。総裁室の隣は秘書室で、調査員は今のスパイ。山口淑子や川島芳子は満鉄のスパイなどの説明があった。旧満鉄本社は歴史的建造物と同時に反日教育を行っているように思えた。



旧南満洲鉄道株式会社本社（現大連満鉄陳列館）、
2019.8.27筆者撮影

(2) 東鶏冠山北堡壘

東鶏冠山北堡壘は日露戦争時のロシアの防御要塞で、日本軍による銃弾跡が残っていた。ロシアの塹壕は、長さ64m、高さ5.1m、幅2.7m。東鶏冠山の要塞は文化大革命時代に反面教師として残した。



ロシアの防御要塞、2019.8.27筆者撮影

(3) 二〇三高地

二〇三高地に登ったが、旅順口全景は霞んで見えず。水師営会見所⁶⁾で見た115年前の写真とはまったく違っていた。旅順湾口までの距離が5kmで、日本軍の砲弾の射程距離が7kmなので、旅順湾内のロシア艦への総攻撃は可能だと思った。



二〇三高地への道、
2019.8.27筆者撮影

【5日目】

〇大連→某日本企業大連社→大連空港（昼食）→
関空

(1) 経済技術開発区

大連経済技術開発区は1984年に中国最初の経済技術開発区として創設された。面積422km²。日系企業は商社も含めて1550社（2017年）⁷⁾。中国の給料が高くなったので、ベトナムやミャンマーに移っている。課長10万円、その下4000円？ 中国では15年前は給料安かったが、今は高くなっている。

経済技術開発区が近づくにつれ、建設中の工場や大型クレーンが見えた。初象である。

(2) 某日本企業大連社訪問

会社概要の説明後、工場見学した。案内は、流ちょうな日本語を話す中国人女性に中国人男性が加わり、日本人工場長が補佐する形で行われた。繁忙期の人員配置や顧客ニーズに対する工夫など、外国に進出する日本企業の活動の一端を知ることができた。某日本企業大連社および経済技術開発区は顕象である。

3 社会主義国・中国

(1) 標語、スローガン

標語が多い。特に気になったのが、習近平を冠した標語があること。一般的な社会主義思想の標語ならまだしも、個人を冠するのはどうかと思った。瀋撫開発区や旅順開発区のような新興地域には特に標語を強調しているように思えた。ある標語の内容は、「社会主義核心价值観」、その下に「富强」「民主」「文明」「和諧」「自由」「平等」「公正」「法治」「爱国」「敬业」「诚信」「友善」と書かれている。



標語、2019.8.25筆者撮影

(2) 光と影

光は、中国は豊かで発展している。みんな満足している（と思われる）。1978年12月以降の鄧小平による改革開放政策は、「豊かになれる者から豊かになれ」=先富論で、豊かになった人は満足している。ガイドさんは子ども時代に人民公社について、「大釜の飯を食う政策」と習ったそうだが、今はその片鱗さえもない。国の施策は強力で、あつという間に都市改造ができる。土地私有がなく、強力な一党独裁政権の成せる技である。

影（成長に取り残された部分）は、どこにあるのだろうか。景観では、大通り横の脇道で庶民生活を垣間見ることができた。例えば、リヤカーで物を運ぶ人。路上で散髪をしている人。ランニングシャツ姿にサンダル履き、話し終えてタバコをポイ捨てする人などである。庶民の生活は残象ではない。普通の生活である。しかし、普通の生活

が一気に変わる可能性があるのが中国。戸籍も都市戸籍4億人と農村戸籍9億人⁸⁾は、はっきりしている。また、選挙がない。町の人を見ていて、この人たち、選挙がないことを不思議に思わないのかと感じた。成長する中国国内の格差、社会主義本来の理想である「平等」は、今の中国にはないのか、追求しないのかと思った。



路上で散髪をする人、2019.8.27筆者撮影

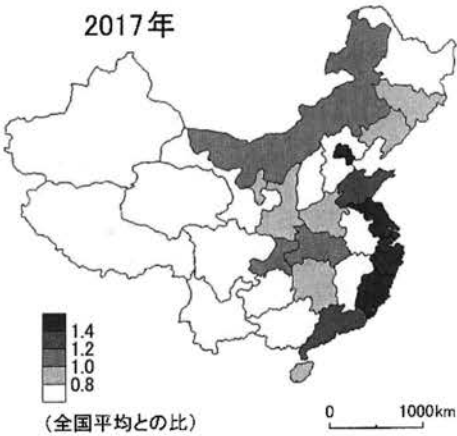
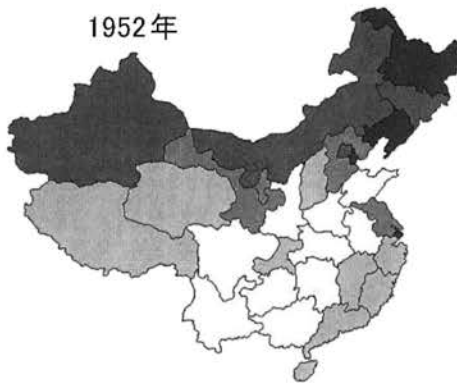
4 地歴連携授業試案

○本時のテーマ；中国遼寧省の地誌

○本時の目標；中国遼寧省の歴史と地理を理解し、日本と中国の関係を考えることができる。

○本時の展開

	学習内容・活動	指導上の留意点	資料	評価の観点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 遼寧省の歴史 日本の租借地としての旅順・大連、満州事変、満州国（偽満州国）、南満州鉄道株式会社、鉱山経営、満蒙開拓など。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史地図等をとおして概要を確認させる。 国策としての満蒙開拓。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史教科書等 遼寧省の見聞記 	<ul style="list-style-type: none"> 【知識・技能】 ～を理解している。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ①中華人民共和国建国当時（1952年） [発問1] なぜ、東北部（遼寧省）は豊かだったのだろうか？ ・東北部（遼寧省）の歴史を資料等から考える。 個人で、グループで考え、発表する。 ②改革開放政策（1978年以降） [発問2] なぜ、中国沿海部は豊かになったのだろうか？ ・教科書・地図帳・資料等から考える。 ・個人で、グループで考え、発表する。 ③中国の発展による変化 [発問3] 中国の発展によってどのような変化が起こったのだろうか？ ・資料等から考える。 ・個人で、グループで考え、発表する。 ④日本と中国の関係 [発問4] 今後の日中関係を考えよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的背景；南満州鉄道株式会社および満州国（偽満州国）による鉱工業や農業の基盤を、国家施策として引き継いだことを考えさせる。 ・社会的条件；経済特区・経済技術開発区の創設、外資導入、社会主義市場経済、農村から都市への移動（農民工）、都市戸籍と農村戸籍などを考えさせる。 ・社会的条件；国民生活の向上、所得増、物価高、外国企業の中国以外への移動、日本企業進出、貿易、交流などを考えさせる。 ・課題と方策を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史教科書等 資料1 遼寧省の見聞記 地理教科書等 資料1 資料2 資料3 資料1 資料2 資料3 遼寧省の見聞記 	<ul style="list-style-type: none"> 【思考・判断・表現】 ～について、探究し、表現している。 ①～④ 【主体的に学習に取り組む態度】 ～について、知識技能を身に付けたり、思考・判断・表現をしようとしている。 ①～④
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 歴史と地理をとおして、中国遼寧省の地誌をまとめる。 日本と中国の関係を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史（時間軸）と地理（空間軸）を連携して考えさせる。 国際理解の観点。 		



資料1 各年次の省別1人あたりGDPの全国平均との比
小島泰雄(2019)改革開放は中国をいかに変えたか、『地理』Vol. 64-4、古今書院、口絵より抜粋

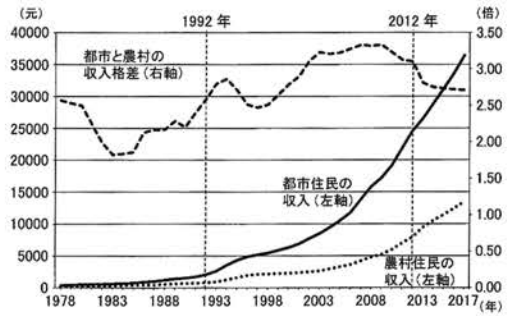


図3 都市と農村の1人あたり収入の変遷
資料：中国統計年鑑

資料2 都市と農村の1人あたり収入の変遷

小島泰雄(2019)改革開放は中国をいかに変えたか、『地理』Vol.64-4、古今書院、p.16より

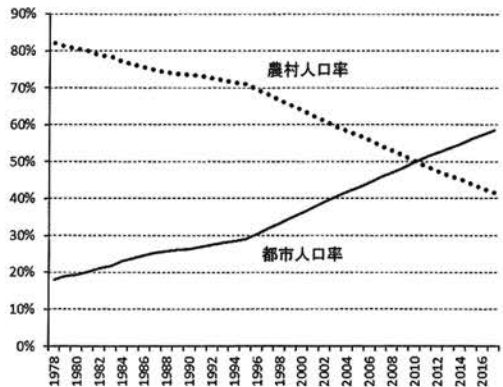


図1 中国における都市人口率と農村人口率の推移(1978年～2017年)

資料：国家統計局データより作成。

資料3 中国における都市人口率と農村人口率の推移

張 貴民(2019)改革開放の中に揺れ動く中国農民、『地理』Vol. 64-4、古今書院、p.20より

5 おわりに

中国遼寧省の見聞記と地歴連携授業試案を示したが、50分授業で指導案のすべてを行うことはできないと思われる。歴史授業50分、地理授業50分が適当か。内容的には、高等学校地歴科の「地理総合」または「地理探究」と思われるが、高等学校の「歴史総合」や中学校の歴史および地理授業の参考にしていただければ幸いである。

遼寧省など中国東北部は、これまで主に歴史授業で扱っている。地理授業では中国南部の広東省や福建省の経済特区や上海などの経済成長と、それに対する内陸部の農村から都市への移動を考えるのが一般的である。今回、地誌学習にしたのは、地域には自然環境、歴史的背景、社会的条件（社会環境）のもと、人々の営みがあり、歴史（時間軸）と地理（空間軸）の両面からアプローチするとその地域性が浮き彫りになるのではないかと考えた。これは学習指導要領がいう「多面的・多角的」な考察に通じるものである。

教員はたゆまぬ教材研究と工夫が必要で、教員自身の実体験は授業を生き生きとしたものにする。近年、チョーク&トークの授業に加え、知識構成型ジグソー法を含む「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニング）が推奨されている。そのためには、「知識・技能」が必要であり、鍵となる発問（Key Question）によって「思考力・判断力・表現力」が向上すると考える。次代の教員は、生徒の興味関心を高め、「なぜ疑問」を核とし、課題解決の方策を考えさせるなど、深い学びの授業に留意してほしい。

註および参考文献

- 1) 「初象」「顕象」「残象」は東京文理科大学名誉教授・立正大学名誉教授で地理学者の田中啓爾（1885～1975）によって提唱された。
- 2) 『データブック オブ・ザ・ワールド2019』二宮書店2019年p.50
- 3) 前掲書2) p.50
- 4) 『地球の歩き方2019～2020 大連 瀋陽 ハルビン 中国東北地方の自然と文化』ダイヤモンド

社2018年p.145。ただし、現地の説明板には東西18km、南北2～2.5km、面積32.5km²と記されていた。

- 5) 長興善郎・四方田犬彦解説（2015）『復刻版少年満洲讀本』徳間文庫カレッジ317p。この本は1938年に刊行されたが、戦後GHQによって焚書の対象になった。
- 6) 日露戦争時の1905年、乃木希典とロシアのステッセルが会見を行った場所。
- 7) ジェトロ（2018）大連市概況
https://www.jetro.go.jp/ext_images/world/asia/cn/tohoku/pdf/overview_01_dalian_1807.pdf 2019年11月18日検索
- 8) 中国の戸籍制度は1958年に制定された。本稿での都市戸籍4億人、農村戸籍9億人の表記は、講談社BOOK倶楽部のwebサイト（news.kodansha.co.jp/5327、2019年12月2日検索）の記事「今日のおすすめ」に、野口幸宏が「9億人の農村戸籍と4億人の都市戸籍ー中国のアパルトヘイトが容赦ない件」として、川島博之（2017）『戸籍アパルトヘイト国家・中国』の書評を書いており、その文言を引用した。ただ、中学校教科書『新編 新しい社会 地理』東京書籍2019年p.51のグラフには、2015年の統計として、人口13.7億人、都市人口56.1%、農村人口43.9%と記されている。これは、戸籍地とは関係なく、都市人口を都市地域に居住するすべての人口とし、それ以外を農村人口としているためであると思われる。（張 貴民（2019）改革開放の中に揺れ動く中国農民、『地理』Vol.64-4、古今書院 p.20参照）